

# ヴェルサイユ宮殿(ヴェルサイユ城) (世界遺産登録)

## (イヴリーヌ県ヴェルサイユ)

ヴェルサイユ宮殿（ヴェルサイユきゅうでん、フランス語：一番多く使用されている、「ヴェルサイユ城」との意味である Château de Versailles、あるいは、「ヴェルサイユ宮殿」との意味である Palais de Versailles）は、1682年にフランス王ルイ14世（1638年 - 1715年、在位1643年 - 1715年）が建てたフランスの宮殿（建設当初は離宮）である。ヴェルサイユ宮殿とも表記される。

パリの南西22キロに位置する、イヴリーヌ県ヴェルサイユにある。主な部分の設計はマンサールとル・ブランによっておこなわれ、庭園はアンドレ・ル・ノートルによって造営された。バロック建築の代表作で、豪華な建物と広大な美しい庭園で有名である。

### 概要

ヴェルサイユ宮殿は、ルイ14世が建造した宮殿である。そのため、フランス絶対王政の象徴的建造物ともいわれる。ルイ14世をはじめとした王族と、その臣下が共に住むヴェルサイユ宮殿においては、生活のすべてが絶対王政の実現のために利用され、その結果さまざまなルール、エチケット、マナーが生まれた。

### 噴水庭園

宮殿の建設よりも労力を費やされている噴水庭園には、宮殿建設の25,000人に対し、36,000人が投入されている。そして、その噴水にはルイ14世の三つの意図が込められている。

#### 「水なき地に水を引く」

ヴェルサイユには近くに水を引く高地がない。ルイ14世は10km離れたセヌ川の川岸にマルリーの機械と呼ばれる巨大な揚水装置を設置し、堤の上に水を上げさせた。そして古代ローマに倣って水道橋を作って、水をヴェルサイユまで運び、巨大な貯水槽に溜め込んだ。こうして水なき地で常に水を噴き上げる噴水庭園を完成させ、自然をも変える力を周囲に示した。

#### 「貴族を従わせる」

ルイ14世は10歳の時にフロンドの乱で、貴族たちに命を脅かされたことがある。ルイ14世はこの体験を一生忘れず、彼は貴族をヴェルサイユに強制移住させた。

- 「ラトナの噴水」は、ギリシャ神話に登場するラトナ（レートー）が村人に泥を投げつけられながらも、息子の太陽神アポロンを守っている銅像と、その足元にある蛙やトカゲは神の怒りに触れて村人たちが変えられた像を、模った噴水である。ラトナとアポロンはフロンドの乱の時、彼を守ってくれた母と幼いルイ14世自身を示し、蛙やトカゲに変えられた村人は貴族たちをあらわしている。王に反抗をする者は許さないという宣言を示している。
- 「太陽神アポロンの噴水」は、アポロンは天馬に引かれて海中から姿をあらわし、天に駆け上ろうとしているものを模った噴水である。アポロンはルイ14世自身をあらわし、彼が天空から地上の全てを従わせると示している。

#### 「民衆の心をつかむ」

ルイ14世は民衆の誰もがヴェルサイユに入るのを許し、民衆に庭園の見方を教える「王の庭園鑑賞法」というガイドブックを発行した。それには「ラトナの噴水の手前で一休みして、ラトナ、周りにある彫刻をみよ。王の散歩道、アポロンの噴水、その向こうの運河を見渡そう」と書かれている。民衆は、ガイドブックに従って庭園を鑑賞することで、貴族と自然を圧倒した王の偉大さを刷り込まれていった。夏、ヴェルサイユでは毎晩のように祭典が催され、訪れた民衆はバレエや舞劇に酔いしれた。

## 沿革

- 1624年 ルイ13世の狩猟の館として建てられる
- 1661年-65年 ルイ14世が建築家ル・ヴォーを招き、増築（同じ頃、ルーヴル宮殿の改築も計画されていたが、王がヴェルサイユの方を気に入ったため、ルーヴル宮殿の計画は縮小された）
- 1667年-70年頃 ル・ノートルによる造園
- 1675年-82年 セーヌ川にダムを築き噴水工事
- 1668年- ル・ヴォーによる第二次の増築

マンサールによる増築、鏡の間を造る（天井画はル・ブランによる）

- 1699年-1710年 礼拝堂建設
- 1753年-1770年 オペラ劇場建設

## 構造

儀式や外国の賓客を謁見するために使われた鏡の間は、1871年にドイツ皇帝ヴィルヘルム1世の即位式が行われ、また第一次世界大戦後の対ドイツとの講和条約であるヴェルサイユ条約が調印された場所でもある。鏡の間にはたくさんの銀製品が飾られていたというが、ルイ14世は晩年になって、スペインとの王位継承争いが続いて戦費の捻出に困り、破産を免れるためにこれらを売って戦費に充てたという。

Wikipediaによる

